

トマト青枯病（病原菌：*Ralstonia solanacearum*）

○ 被害と発生生態

本病は、細菌による病害である。発病初期の病徴は、葉の先端部が昼間に萎凋し、曇天時や夜間に回復する症状を繰り返すが、その後回復しなくなり、株全体が青枯れ症状になり、最終的には枯死に至る（図1、2）。高温時に栽培する夏秋型、抑制型栽培で発生・被害が多い。本県では夏秋型栽培トマトで被害が多い。

本病は平均気温 20℃で発生し始め、20～30℃で激発する。病原細菌は、被害植物の茎葉や根とともに土中に入り長く生存して土壌伝染し、主として根から感染し、導管部で増殖するため、維管束部は茶褐色を呈することが多い（図3）。切断部を水に浸けると維管束部から白色の菌泥が漏出する（図4）。

○ 防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

- ・青枯病抵抗性台木を利用した接ぎ木栽培を行う。通常の接ぎ木栽培でも発病が認められる場合には、高接ぎ木栽培（台木の本葉2葉以上で接ぎ木）を行う。
- ・病原菌に汚染されていない育苗培土を用いる。
- ・ほ場の排水対策を徹底する。
- ・発病株は直ちに除去する。

（イ）薬剤防除

- ・接ぎ木栽培で発病株率が 20% 以上の場合には土壌消毒を行う。土壌消毒は、深層部までの消毒が可能なクロルピクリン錠剤の深耕混和処理、糖蜜を利用した土壌還元処理などを行う。
- ・二次伝染を防ぐため、作業で使用中のハサミ、手袋などを随時消毒剤（アルコール、塩素系）で消毒する。



図1 青枯れ症状株



図2 枯死した株



図3 維管束部の褐変

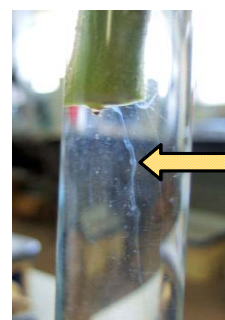


図4 病原細菌の漏出
（茎の断面を約 10 分間水に浸ける）